

体育実技授業とスポーツ種目とに対する態度の研究

—東大新入生にみられる最近10年の変化を中心として—

平田 久雄* 戸荻 晴彦* 岡野 崇彦*

Students' Attitudes Toward the Required Physical Activity Courses and the Types of Sports—Changes of Attitudes in the Freshmen of the University of Tokyo in the Last Decade

by

HISAO HIRATA*, HARUHIKO TOGARI* and TAKAHIKO OKANO*

Abstracts

In this study a comparison was made between the results obtained by the use of the same attitude inventory on the required physical activity courses and the types of sports (see the *Proceedings*, No. 6, 1972, pp. 27-32.) which was administered to the freshmen (male) of the University of Tokyo in 1967 and 1977. Followings are the findings of this study.

1. So far as measured by our attitude scales, no significant changes were found in the students' attitudes toward the required physical activity courses.

2. The types of sports which enjoyed more students' selections as the desired activities for participation in 1977 than in 1967 were tennis (hard ball), softball and badminton, and those which suffered remarkable decrease in selection were bowling, tennis (rubber ball) and volleyball.

3. As to sports in which students had participated prior to their entrance in the university, such leisure sports as bowling, ski, skate, etc. and judo and kendo showed an increase in their absolute numbers of participants, and higher rates of increase in 1977 over 1967 were found in tennis (hard ball) and golf.

4. Remarkable increase in the development of knowledge on sports was revealed in bowling, tennis (hard ball), golf and badminton.

5. In tennis (hard ball) and badminton the rates of students' experiences and knowledge acquisitions and interest were all enhanced and thus students' selections also increased; whereas, in bowling, ski and skate, even though students' experiences were enhanced, their selections were reduced.

6. In judo and kendo, though the rates of students' experiences and knowledge acquisition were enhanced, students' interests were reduced. These two were the typical cases in which students' experiences did not go with their interests.

Many of the above findings seemed to be understandable when reflected upon the changes appeared in our society in the last ten years.

* 東京大学教養学部体育研究室 (Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

緒 言

本研究で報告する2回の調査のうち、第1回目のものは、昭和42年5月に、東京大学教養学部体育科の当時の教室研究であった「大学正課体育実技の教育効果に関する研究」の一環として、昭和42年度入学生を対象として行なったものである。調査の内容は、正課体育実技授業に対する態度と、スポーツ種目の選択・好嫌等に関する質問紙調査で、その成果の一部は、岡野らにより体育学紀要第6号に報告されている¹⁾。

爾来満10年を経過し、社会情勢の変化にともなう、最近入学してくる学生達の態度・意識に当然さまざまな変化が予想されるところである。そこで、両者の比較のために、当時の調査票をなるべく変更しないという方針で、昭和52年4月入学の男子学生を対象に、同年5月、第2回目の調査を行なった。

従って、研究のねらいの第1は、10年を隔てて入学してきた東大新入生を通して見た体育実技授業とスポーツ種目とに対する態度の変化の実態を明らかにすることと、次にそれらの変化の裏にある心理的背景の一端を、本調査資料の範囲内で考察することとである。

対 象

第1回目の昭和42年実施の対象は、同年4月入学の東京大学1年生男子236名であり、第2回目の52年実施分は、昭和52年4月入学の1年生男子381名である。これらの科類別構成は表1の通りである。科類別標本数の比率は、学生定員の比率と著しく異なっていないことがわかる。

表1 標本の科類別構成

年度	昭和42年度 標本数(%)	昭和52年度 標本数(%)	学生定員 (%)
文科1, 2類	81 (34.3)	110 (28.9)	(32.6)
文科3類	43 (18.2)	69 (18.1)	(12.1)
理科1類	71 (30.1)	109 (28.6)	(35.7)
理科2, 3類	41 (17.4)	93 (24.4)	(19.6)
計	236 (100.0)	381 (100.0)	(100.0)

時 期

調査の実施時期は、いずれも5月上旬である。大学入学後の正課体育授業としては、教室におけるガイダンスを受けたのみで実技の授業は受けていない。また実技の選択種目も、決めていない段階の調査であった。従って、入学年度は違っても調査の実施時期としての条件は、両群にとって同じであったと考えてよい。また、入学後の授業による態度への影響は、ほとんどないと考えられる。

方 法

体育実技授業に対する態度の調査票は、Wear, C.L. の Physical education attitude inventory を参考として、表2に示したような態度を表現した意見項目からなっている^{2) 3)}。ただし、第1回目は、体育学紀要6号の調査票(B)に掲げた25項目であり、第2回目はこのうち採点に無関係な

表2 体育実技授業に対する意見項目

項目 番号	意 見 項 目
	体育実技の授業は……
1	選択科目であるべきである
2	週1回では少ない
3	時間の浪費である
4	身体を鍛えるために必要である
5	3, 4年にももうけるべきである
6	気分を爽快にするものである
7	レクリエーションとしてのみ意味があるものである
8	健康の維持増進を助ける重要な科目である
9	人を粗暴にするものである
10	正課としては不必要である
11	性質を朗らかにするものである
12	思索力を麻痺させる
13	自然な運動というよりも不自然な運動を強いることが多い
14	人を単純にする
15	意志を強固にするものである
16	日常生活との結びつきはうすいものである
17	勝負にはしり品性を下劣にする
18	たんに運動不足を解消させるだけのものである
19	人間性を豊かにする
20	学力を低下させる